



監督＝カン・ウソク／原作＝ベク・ドンホ／脚本＝キム・ヒジエ／出演＝ソル・ギョング／アン・ソング／ホ・ジュノ／チョン・ジェヨン／カン・シニル／イ・ジョンホン（東映配給／2003年韓国映画／135分）

シルミドとは、韓国仁川沖の無人島「シルミド美尾島」。ここで訓練を受けた31名から成る「684部隊」とは、1968年4月に結成された、北朝鮮の金日成主席暗殺のための特殊部隊。しかし、歴史の歯車の動きの中で、彼らの存在価値は喪失したばかりか、逆に……？ 1990年代に入ってから、少しずつその真相が明らかになってきた、30数年前の歴史上の秘話（の一部）が今、大公開！ その迫力はすさまじいもの！ 平和な国、ニッポンと対比しながら、真剣に考えるべき格好の素材だ。韓国に続き、日本での大ヒットを期待したいが……？

🎬「684部隊」とは？

684部隊とは、北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）の金日成主席を暗殺するため、極秘に結成された31名から成る特殊部隊。彼らは元死刑囚や、人生の裏街道を歩んできた「曰くありげ」な人物ばかり。なぜ31名の部隊なのか？ その答えは、韓国のパク・チョンヒ大統領が執務する青瓦台（韓国大統領府）が、北朝鮮の特殊部隊31名によって襲われるという、青瓦台襲撃事件（1.21事態）に対する報復のため、人数も全く同じ31名で構成したためだ。

また、684部隊という命名は、1968年4月にこの特殊部隊が結成されたため。考えてみれば、1968年という年は昭和43年。私がライフワークとしているまちづくり法分野で、母なる法と言われている都市計画法が制定されて近代都市法が成立し、また、田中角栄が総理となり、「日本列島改造論」が本格的にスタート

するのはこの数年後の1972年。

そしてまた、60年安保闘争の継続としての70年安保闘争や、大学闘争の盛り上がりはあったものの、結果的にそれは、一時の花火のようなものに終わり、以降、日本はひたすら経済繁栄の道を歩み続けることになった、ターニングポイントとなった時期だ。しかしそんな時、お隣の国、韓国では……？

南北朝鮮問題は深刻、そして今、韓国は……？

1945年の敗戦から今日まで60年近く、基本的に、自民党政権が「安定的」に継続してきた日本の政治状況とは大きく異なり、1948年に南北に分断された後の韓国の政治は激変の歴史。1つの大事件は、1973年8月、東京で発生した金大中氏（後に大統領）の拉致事件。これを日本の阪本順治監督の目から描いた映画が『KT』（02年）だが、『SILMIDO（シルミド）』はこれ以上にショッキングな大事件である「^{シルミド}実尾島事件」を描いた映画。

2003年2月、金大中大統領の後を受けて、第16代大統領として登場した盧武鉉氏は、就任当時56歳で、韓国の「民主化運動」を体験した人権派弁護士という経歴を持つ人物。そんな盧武鉉大統領は就任演説で第1に、北朝鮮との「平和繁栄政策」を掲げて、「対話路線」を進めようとしたが、高建首相の任命や若手閣僚の起用について、国会の過半数を占める最大野党、ハンナラ党の猛反対を受けて大苦戦。

そして遂には、2004年3月12日国会で、盧武鉉大統領の弾劾決議案の可決という、韓国憲政史上、前例のない事態にまで発展した。しかしその後、2004年4月15日に実施された韓国総選挙の結果、少数与党であったウリ党は一気に躍進して152議席を占めたのに対し、ハンナラ党は121議席に大きく後退し、国会の勢力図は大きく変わった。驚くべきは、国会議員299名のうち188名（63%）が入れかわったこと。このような、何ともダイナミックな政治の動きは、到底日本では想像できないものだ。

韓国を代表するスターたちの迫力満点の演技

無人島の^{シルミド}実尾島で、31名の特殊部隊を訓練する責任者は、韓国空軍隊長のチ

エ・ジェヒョン（アン・ソンギ）。アン・ソンギは、古くは『ディープ・ブルー・ナイト』（84年）から、最近日本で公開された『武士（MUSA）』（01年）まで、幅広く70本以上の映画に出演している、韓国を代表する大スター。そのアン・ソンギが、前半は厳しい鬼教官として、後半は「国家意思」の180度転換に苦悩する軍人として、実にしまったいい演技を見せている。

他方、31名の訓練兵は、訓練の経過の中で3班に分けられるが、その3人の班長はそれぞれ個性的。中でも、第3班の班長のカン・インチャン（ソル・ギョング）は、父親が「北」に亡命したことの負い目から、鉄砲玉ヤクザとなった死刑囚。金日成の命をとることで引きかえに免罪される約束で実尾島^{シルミド}に入り、持ち前の実直さと剛毅さから、チェ・ジェヒョンからも信頼され、実質的に訓練兵全体のリーダーとなる。さらに、第1班の班長のハン・サンピル（ジョン・ジェヨン）は、血気盛んでカン・インチャンに対抗心を燃やす男。また第2班の班長は、冷静沈着なクンジェ（カン・シニル）。

また、チェ・ジェヒョンの片腕の1人がチョ軍曹（ホ・ジュノ）、もう1人がパク軍曹（イ・ジョンホン）。訓練兵を鍛えている間は大きな問題は発生しないものの、物語が進行し、自己と国家との矛盾が表面化し、深刻になるにつれて、次第にこの2人の対立が鮮明に……。男ばかりの集団による過酷な訓練づけの毎日の中、必然的に浮かびあがってくるこれら各人のパーソナリティがスリリングにぶつかり合う姿を、これらの俳優たちが熱演することによって、深みのある人間像と迫力ある人間関係が次々と見事に表現されていく。

♣ 訓練中のエピソード2話

シルミドにおける過酷な訓練づけの生活の中にも、映画はちょっとしたエピソードを描く。その1つは、訓練兵チャンソク（カン・ソンジン）の訓練中の事故。足を骨折して、もはや戦闘要員として役に立たなくなったチャンソクは、島からの退去を命じられるが、今さら刑務所の中に戻るのはいや。そこで、炊事兵として働かせようというカン・インチャンらの提案を、チェ・ジェヒョンも受け入れることに。いくら厳しい環境の中でも、これは人間の気持の交流が不可欠なことを、うまく教えてくれるエピソード。

他方、困ったエピソードは、ウォニ（イム・ウォニ）ら2人が、女を求めて、潮の満ち引きによってできる道を歩いて、隣の島へ出かけていったこと。こりゃ大変！ その結末は……？

個人の尊厳と国家意思の対立は深刻

684部隊の創設は、1968年1月韓国内で起こった、「青瓦台襲撃事件（1.21事態）」に対する報復のため。そしてそれは、国家意思によるもの。そうすると、南北関係をめぐっての国家意思が180度転換されれば、その存在根拠はどうなるのか？ それは容易に理解できること。

つまり、684部隊の解散、解体だ。ところが、この684部隊の創設は、大統領直属の最高権力機構として、1961年に創設された韓国中央情報部（KCIA）の部長の発案によるもので、国家の最高機密事項。そうすると、情勢の変化の中で下される、新たな国家意思とは……？

時代に翻弄される人々の姿は、あらゆる時代、あらゆる社会の中でいろいろな映画に描かれているが、この^{シルミド}実尾島における684部隊のそれは、本当に過酷なもの……。

決行！ 中止！ 抹殺！ 蜂起！

この『SILMIDO（シルミド）』に寄せる著名人たちの反応が、新聞広告に載せられているが、それらはいずれも熱いもの。そりゃそうだろう。厳しい訓練を経て、最強の戦士になったと隊長から認められ、いよいよ「明日決行！」となった彼らは、一夜酒を飲み、思いのたけを語り合った。そして決行日！ ゴムボートに乗り込み、「北」に向かって進み始めた彼らだったが……。

そこからドラマは急転直下。決行の中止、そして部隊の抹殺へ。隊長とその片腕の2人、そして、684部隊そのものの隊員たちは、目の前に突きつけられた、あまりにも非常な国家意思に対してどう向かい合い、どう行動するのか？

選択肢はたった2つ。すなわち死か、それとも抵抗か？ ということ。俳優たちの熱演の中、この激動のドラマが実にスリリングに展開し、心を打つものに仕上がっている。

カン・ウソク監督の『SILMIDO (シルミド)』に賭ける意欲

「^{シルミド}実尾島事件」の発生は、1971年8月23日のこと。バスを奪取した684部隊の生き残り24名は、4人の生存者を除いて全員死亡し、生き残った4人も翌1972年3月10日、死刑が執行された。しかし、この「^{シルミド}実尾島事件」の真相は、以降30年以上にわたって、国家の重要機密事項として封印されてきた。それが少しずつ明らかになってきたきっかけは、1993年、^{シルミド}実尾島の教官生存者の告白手記が月刊『新東亜』に掲載されたこと。

この「^{シルミド}実尾島事件」を素材として、すばらしい映画をつくりあげたのは、カン・ウソク監督。彼は映画監督であるとともに、他方で、自らが設立したシネマ・サービスの会長として、映画投資、制作、配給の業務を行う事業家としても傑出した存在だ。1960年生まれの若手だが、その才能には目を見張るばかり。

そのカン・ウソク監督の話題作『SILMIDO (シルミド)』は、ほとんどCGを使わず、各地を転々としながら、厳しい状況下での撮影を続けたとのことだ。この映画を観ていると、そんなカン・ウソク監督の『SILMIDO (シルミド)』に賭けた意欲が十分に伝わってくる。

映画のラストと余韻

そして、この映画のラストはどうなるのか？ それは当然、ここでは書かないでおこう。過酷な訓練に耐えたことを否定され、自分たちの部隊の任務を否定され、そして生命はおろか、その名前すらも抹殺されようとした彼らの最後は、涙を誘うもの。そして、あらためて国家権力と個人の生き方との関係を、真剣に考えさせられるもの。1人1人がこの映画を観終わった後、じっくりとその余韻の中で、このテーマについて考えてみたいものだ。

韓国では、韓国映画史上初の1000万人動員を達成したとのことだが、私はこの映画が日本でも大ヒットし、またこの映画を素材にした、さまざまな議論が巻き起こることを期待したい。

2004(平成16)年6月9日記